日本図書館文化史研究会
ニュースレター
第71号　2000年　2月20日

目　次

・1999年度 関東地区研究例会報告
　アメリカ政府印刷局をめぐる歴史
　　—第1次大戦期～ニューディール期を中心に—　（古賀 崇）
　小柳屯『木造図書館の時代』（石風社, 1999年），『小柳屯図書館関係レポート』（石風社, 1999年）について　（山口源治郎）
　紹介　坂本龍三『岡田健蔵伝：北日本が生んだ希有の図書館人』（講談社出版ｻｰﾋﾞｽｾﾝﾀｰ, 1998）　（小川 徹）
・旧刊書評・随想(1) 酒とバラの日々にあけくれた17世紀の出版人　（工藤一郎）
・研究例会／第17回研究集会・総会 のお知らせ
・会員名簿について／会員動向
・事務局から

１９９９年度　関東地区第２回研究例会報告　（1999年12月18日国立国会図書館）

アメリカ政府印刷局をめぐる歴史
—第1次大戦期～ニューディール期を中心に—

古賀　崇
（東京大学大学院教育学研究科）

アメリカ政府印刷局（Government Printing Office: GPO）は1861年の設立以来，連邦政府の刊行物を印刷，販売，頒布し，連邦政府刊行物寄託図書館制度（Federal Depository Library Program: FDLP）を監督してきた。GPOは議会傘下の機関でありながら行政府刊行物をも印刷するのが建前であった。しかし第1次大戦期～ニューディール期は行政府の拡大に伴い立法府・行政府の対立が激化した時期であり，GPOの活動をめぐっても様々な問題が生じた。今回の報告ではJohn S. Walters（ユタ州立大学図書館）の研究に依拠しつつ，この時期を中心にGPOの歴史を述べた。

GPOの活動が政争の具となるきっかけをつくったのは，Woodrow Wilson大統領が第1次大戦参戦と同じく1917年に大統領府に設立した「広報委員会（Committee on Public Information: CPI）」である。ここがWilson民主党政権のプロパガンダを行う傍らで各行政機関の広報誌を発行した。これに対し，GPOほか政府印刷活動の監督機関である連邦議会内の印刷合同委員会（JointCommittee on Printing: JCP）にはAlbert Johnson，Reed Smootという，Wilson政権への強硬な反対（反国際連盟など

の立場で）を唱える共和党議員がメンバーに加わり，「反プロパガンダ」の名目でCPIをはじめとする行政府の印刷・出版活動に対する厳しい統制を試みた。すなわち，Johnson ら JCP メンバーは「JCP が認可しない行政府刊行物は発行させない」という法律を1919年に成立させたほか，1921年までに CPI ほか行政機関が発行する逐次刊行物266タイトルを査察し，うち255タイトルを廃刊に追い込んだ。これに対し，各行政機関は1920年代よりオフセット印刷を JCP からの統制の抜け道として活用した。「オフセットは印刷ではなく複製であり，JCP の監視対象外である」というのがその名目であるが，実際にはれっきとした刊行物がオフセットによっても出来上がった。これは「行政府の業務に対する議会からの介入」「GPO での印刷業務の遅滞」への対抗策として行政府内では支持されたが，行政府による GPO を迂回しての印刷の増加は「遺漏資料」（FDLP に提供されず政府刊行物目録への記載もなし）の増加をもたらす結果にもつながった。

ニューディール期においては，行政府のさらなる拡大，および「大衆こそが政治を動かす」という Franklin Roosevelt 大統領の考えの下で，行政府刊行物が一層増加した。これに対してもプロパガンダとの批判が成されたが，Wilson 期ほど激烈ではなかった。むしろこの時期の特色は印刷予算配分のアンバランスにあった。すなわち，ニューディール政策の広報にかかわる刊行物への予算は拡大した一方で，政府による科学技術報告書については予算不足のため頒布が十分に行えず，研究成果の国民への浸透に支障を来すこととなった。

最後に，アメリカの政府刊行物は歴史資料として，また政治的コミュニケーションの手段として重要な役割を持っていること，その反面で「政府による印刷・出版活動は国民の利益の保証かプロパガンダか」などをめぐる議論は絶え間なく続いていること，政府刊行物へのアクセスに関する図書館界の役割についての歴史研究はアメリカでも不十分であること，を指摘して発表のまとめとした。

小柳屯『木造図書館の時代』（石風社 1999年），『小柳屯図書館関係レポート』（石風社 1999年）について

山口 源治郎
（東京学芸大学）

大牟田市立図書館に長らく勤務していた小柳屯氏（1930年－）のこの二つの著書は、戦後の地方の公立図書館についての貴重な記録であることにとどまらず、戦後を生き、公共図書館の変革をめざした図書館員の自己形成の記録としても貴重である。

本書では、「中小レポート」前後（1950-60年代）の日本の公立図書館の実態が大牟田の実例から浮き彫りにされる。それは県立図書館の模倣であり、下足番、入館票、閉架、帳簿式貸出、ワークショップなど、もうすでに見られなくなったサービス方法である。

小柳氏はそうした大牟田の状況の中で、中小レポート調査団（八代調査団）への

参加と「中小レポート」の発表を契機に、大牟田市立図書館の「業務改善」に取り組んでゆく。「自分の場所で与えられた条件の中で変革を続けるしか図書館を変える道はない、‥‥日常の小さな仕事、こまごまとした仕事を変えていくこと、これが大牟田のやり方だった」(『時代』p. 79) と氏は述べている。

小柳氏が取り組んだ「業務改善」は、閲覧室の模様替え（閉架から開架へ、受付の廃止）にとどまらず実に多岐にわたる。入館票の廃止、貸出サービスの改善、予約サービスの開始、整理方法の変更、装備の改善など枚挙に暇がない。

また小柳氏のこうした取り組みを支えたものとして、「文通」がある。石井敦氏や前川恒雄氏らとの文通は図書館の変革をめざす者たちの同士的結合を強め、支えたのであった。

また小柳氏の実践と発言の基礎には、「生活綴り方」的方法とでもいうべき方法が横たわっている。「ここまでわかった、ここまでわかったという風に一歩一歩前進しながら仕事をしてきた」。「図書館の「地べた」で考え、悩んでいることを卑近なことを書きつづけることによって、普遍的な悩みに到達し、その解決への糸口をつかむことができるんではないか‥‥こう私は考えています」と、氏は述べている。本書はこの意味で、過去の記録としてより、図書館の方法としても興味を喚起するものである。

紹介　坂本龍三『岡田健蔵伝：北日本が生んだ希有の図書館人』(講談社出版サービスセンター，1998. 8)

小川 徹
(法政大学)

著者は、長年にわたって北海道図書館史について数多くの論考を発表しておられることで知られているが、その作業のなかで函館の図書館の恩人・岡田健蔵について丹念に資料を発掘しつつ、その生涯・仕事の全容を少しずつ明らかにされてきた。本書は、それらをまとめ、かつ新たに書き下ろした伝記を加えて上梓されたものである。内容は、第一部評伝・岡田健蔵、第二部岡田健蔵・研究ノート、第三部年譜・資料集からなっている。第二部は著者の勤務先であった北海道武蔵女子短期大学紀要その他に発表された11本の論考を発表年月順に収録した部分であり、そこに見られる作業をベースとして第一部の評伝が書かれている。第三部の略年譜は大部分を『函館図書館創立60年記念岡田健蔵先生論集』(岡田裡会、1969) によっているとのことであるが、著者による追記事項がある。資料としては貴重な函毎緑叢会規則、函館図書館維持規則などが収められている。

さて、氏によれば、岡田は1883 (明治16) 年函館に生まれ、1903年、数え年21才の時独立し蝋燭製造会社を設立、やがて1906年函館毎日新聞緑叢会 (同新聞の投稿者を中心とした会) に参加、翌年 6月蝋燭工場の片隅を利用して同会図書室を開設。二ヵ月後火災のために自宅・工場・図書室を失う。しかし翌1908年 3月から 4月にかけて工場再建途上にもかかわらず、一切を妹にゆだねて、自費で東北や東京の図

書館視察に出掛け、帰函後図書館設立に奔走、有志の賛同をえて1909年 3月私立函館図書館開館。岡田は主事。この間店舗・住宅は復旧、蝋燭の製造を再開するのであるが、図書館が出来ると、家業を廃して夫婦で図書館に住み込み、ほとんどすべての資産を資料収集につぎ込んでしまう。さらに私立函館図書館の市への移管を実現させ、その市立図書館建築のために市議会議員に立候補、当選。市立函館図書館が完成するとさっと議員を辞して館務に専念し、館長に就任。少なくなかった批判にめげずに、資金の工面をし、大金をはたいて、今に残る貴重な北方資料のコレクションを築き上げたこと、函館大火にあっては、図書館を死守し、その館を罹災者の避難所にしたことなど。やがて館界でも発言するようになる。1944年62才で永眠。図書館がすべてであった驚嘆すべき岡田の生きざま。著者は温かなまなざしでその生涯を克明にたどっておられる。なお函館史蹟保存調査委員としての仕事にみられる函館の文化・歴史への関心、函館に博物館をつくることが夢であり、そのために力をつくしたことは、考古学への関心、絵葉書の収集などとともに岡田の知的関心の広さを物語るものである。

本書から、この国の近代社会の形成期においてすべてを生地函館の図書館に捧げ、ひたむきに生き抜き、その図書館にあって地方における文化の拠点を構築していったひとりの人物の営みを見ることができるとともに、その岡田の仕事をその周辺にあって支えてきた函館のひとびとの姿も透かしてみることができる。そこに函館(の文化)を大切に守り、育てていこうとする地域のひとびと(岡田もそのひとり)のありようがみえる。

この研究会にとって、地方にあって図書館に拠りつつ文化を残す仕事をしながら、その全容が必ずしも知られていないひとびとの発掘はひとつの役割であろう。その結果をわれわれが共有することは意味がある。またこうした本が一般の出版社から出版されにくい時代であるだけに、自費出版によらざるをえなかった本書をここでこうして不十分ではあるが、紹介させていただくことにも意味があると考えられる。なお、出席されていた石井敦氏はエピソードをまじえながら坂本氏の克明な調査の一端を紹介された。

著者が切り開かれ、第一人者となっておられる北海道における図書館史研究、そして岡田についての研究をいっそう深めていかれることを願ってやまない。

会費未納者にお願い

会費が未納になっている方には、今回、再度振込用紙を同封いたしました。年会費3,000円です。年度末３月までに会計処理を行うため早急に振込お願いします。また、既に振り込まれている場合には事務上のミスがないか調査しますので、お手数ですが事務局までご一報ください。

旧刊書評・随想　(1)

酒とバラの日々にあけくれた17世紀の出版人

『明末のはぐれ知識人』：馮夢龍と蘇州文化／大木康著　1995（講談社選書メチエ:45）

工藤 一郎
（大阪学院大学）

たとえばエリザベス朝を代表する人物をえらべといわれたら、シェクスピアをあげるだろう。王侯から乞食にいたる、いろいろな階層の社会風俗を表現してくれるからだ。ここで著者は、馮夢龍を明清交替期の17世紀初頭の中国江南社会を代表する人物としてえらびだした。

夢龍(1574-1646)は明末に活躍した文人で「通俗文学の旗手」であり、その出版者である。なぜ「はぐれ」なのか。まず科挙に合格できなかったから、つぎに「飲む、打つ、買うの三拍子そろった遊び人」であり、さらに当時、蔑視の対象であった戯曲・小説などを出版したから、つまり“道をふみ外した”からである。彼もまた、「白話小説の黄金時代」を演出した有力な一人であった。彼の人生の経過を縦糸とし、社会風俗を横糸として、時間と空間を交差させることによって、この世紀の万華鏡を見事にえがいた。

考えてみると、シェクスピアのハムレットが1601年、わが阿国歌舞伎踊りが1603年であった。遅れること20年、天啓年間に「大編集者」として『警世通言』をはじめとする出版物を、ぞくぞく刊行する。およそ、その20年後に、彼が没しているから、日中両国ともだいたい流動的なバサラの時代で、ちょうど重なるといえる。大航海時代をへて銀貨の流通で世界史が成立していたのである。

中国では王朝の交替期には文学がさかえるが、そのような流動の時代は多少なりとも、どこか正常からカブク人間が輩出するものらしい。シェクスピアにはピューリタン革命が、阿国歌舞伎には幕藩体制の確立があったように、この時期も最後の燭光の燃え上がりにも似て、変革期時代の自由な精神が、やがて来る清王朝の文字の獄の統制にのみこまれてゆく前夜である。

内容章だてはつぎのようになっている。

1.経済と文化の都、　2.すべては科挙へ通ず、　3.酒とバラの日々、　4.文学の大転換、　5.自活の道、　終章．晩年の霹靂。丁寧な参考文献と著作目録がつく。

１、２、４は伝記には直接に関係しないので、すこし退屈しないでもないが、読み進むにつれ、これは当時の「ごくあたりまえ」の生活の実相であることがわかり、目から鱗がおちたのであった。「山のいただきだけを歩くのではなく、そのふもとの方もしかと見定めたいという意図」はたっせられた。

当時だけでなく、中国文化の基礎的知識をコンパクトに教えてくれる。幼児教育、科挙・貢院、字・号、官と吏、花柳界の実情などが手に取るようにわかる。著者の学術論文を読んで、いつも感じるのは、平明でわかりやすいということである。まして一般むけの書物であれば、ユーモアをふくめ、時にはハッとさせられる文章に

であう。中国文学に男の友情の詩が多いのを、評者もかねてより不審におもっていたのだが、この背景には「(方言のため) まったくの孤立無援の地方官の孤独」があったという鋭い示唆などがある。

また科挙制度をもっとも効果的に概観をできる方法は、まず、この本の第２章の簡潔平明な入門からはじめ (科挙試験の段階の心憎い表がある)、今古奇観「老門生、三世に恩を報いること」や、入矢義高の解説によって艾南英「前歴試巻自叙」で受験地獄体験記 (『明代詩文』筑摩書房) をよみ、さらに宮崎市定『科挙』(中公新書) にすすむことであろう。

それにしても、いまさらながら感じるのだが、中国の知識人たちは、少なくとも500年以上にわたり、人生の大半を落第の連続で、それこそ宇宙大としか、例えようもないようなエネルギーを消耗してしまったことか。知識人の夢は合格して官吏になることであるが、かなえられたところで、彼ら大部分は、いくばくも残っていない余生を陰険な権謀術数にまきこまれ、たび重なる追放、放浪の身になるのが落ちであったろう。

半世紀前に活躍した唐寅の悲劇的な晩年を想起させるのだ。この唐寅やゴッホのように狂死した徐渭に比して、生涯落第しつづけはしたが、たくましい馮夢龍の生き方。かの悲劇とこの成功の相違は、どこからくるのか。わが江戸情報屋の藤岡屋も顔負けの「71才のジャーナリスト」として活動できたのも、「明末当時の江南地方で盛んになった出版業と深く関わることによってその才能を遺憾なく発揮」できるようになったことが、その主な理由にあげることができる。わずか半世紀の違いは、あくまでも標識の数字ではあるが、嘉靖・隆慶の50年間の出版点数701点と、丁度彼の生涯と重なる万暦・天啓・崇禎の70年間の1318点の相違からも明白である (p. 186)。万暦以後の空前の「出版業の発展」のために「名と利」を手に入れることができるようになる。

「貢院と官界と花柳界」の三位一体の蘇州の風俗万華鏡をながめているうちに、あらためて西廂記や今古奇観を読み返してみたくなった。

なお著者には、『明末江南における出版文化の研究』(1991) など出版や白話小説に関連する論考が多い。

原稿募集

◇『図書館文化史研究』１７号(2000年9月刊行予定)の原稿を募集します。
原稿の締切は2000年３月31日です。投稿を予定される方は事務局までご一報ください。折り返し「投稿規定・執筆要項」をお送りします。

◇　「ニューズレター」の原稿を募集しています。
研究に関する情報、書評なんでも結構です。(できるだけワープロで、ＭＳ－ＤＯＳ標準テキストの原稿を) 事務局 (石井) あてお送りください。

☆関東地区研究例会（１９９９年度第3回）のお知らせ

図書館文化史研究会では次の予定で例会を開催いたします。多数ご参加ください。なお、この案内は日本図書館情報学会の会員諸氏にもご参加いただけるよう「日本図書館情報学会会報」No.95にも掲載しました。同会報が本会のニューズレターより先に刊行されましたので、本会の会員諸氏には、お知らせが後になりましたが、ご了承ください。

1　日時　2000年3月18日(土)午後２～４時
2　場所　東京大学教育学部１階会議室（丸の内線本郷３丁目駅より７分，
　　南北線東大前駅より１０分）

3　発表
　(1)三浦太郎，中村百合子，古賀崇，根本彰　CIEにおける図書館政策と図書館担当官の役割
　(2)根本彰[書評]「ギトラー自伝」に見る戦後図書館学教育振興の背景
4　問い合わせ先　関東地区研究例会事務局　中林隆明

＊なお，当日当該建物は閉鎖されていますが，１時４０分より２時１０分までの時間帯には玄関から入場できるように手配いたします。もしそれより遅れた場合には，玄関に掲示の指示に従ってください。

☆2000年度日本図書館文化史研究会　第17回研究集会・総会のお知らせ

次年度も下記の要領で、恒例の研究集会・総会を開催いたします。詳しい内容は次号のニューズレターでご案内いたします。

記

日時：2000年９月15日（祝）～17日（日）の内いずれか２日
　　会場等の検討過程で9月9日（土）～10日（日）に変更する場合もあり。
場所：東京　（会場は検討中）
テーマ：アイデア募集中（図書館法制定50年を迎えますが、既に今年度これに因んだテーマで研究集会を開催しました。子供読書年でもあります。図書館の自由宣言の成立過程に関してテーマを設定する案も出ています。また、形式についてシンポジウム形式で実施する案も出ています。皆様のご意見をお寄せください。）

テーマと直接関連しない自由発表も予定していますので、発表を希望される方は事務局石井までご連絡ください。

会員名簿について

次回発行の会員名簿から、掲載希望者についてＦＡＸ番号と E-mail アドレスを収録することにいたします。会員名簿にご自分のＦＡＸ番号と E-mail アドレスのいずれかまたは両方を掲載してもよいとお考えの方は、次回の会費納入時に振込票の通信欄に記入してください。

ご自分のＦＡＸ番号や E-mail アドレスが会員名簿に掲載されるのは好ましくないとお考えの方は、記入する必要はありません。

当会の会員名簿発行は、２年に一度が慣例となっています。前回は1999年２月に発行しましたので、次回は2001年２月発行予定です。現在1999年度会費未納の方は早急に振り込んでいただきたいのですが、その際、上の要領で通信欄にご記入ください。その他の方は、５月刊行予定のニューズレターを発送する際に、2000年度会費振込用紙を同封しますので、同様にお願いいたします。

（石井個人のメールアドレスは　　です。事務局への連絡にご利用ください。）

会員動向

新入会員

住所変更

事務局から

☆ニューズレター７０号（前号）の関東地区研究例会の案内記事 p. 10の中で「岡本建蔵」とある（２箇所）のは、「岡田健蔵」の誤りでした。お詫びして訂正します。

☆機関誌「図書館文化史研究」No. 16が刊行されました。既に皆様のお手元に届いていると思います。ご感想をお寄せください。

日本図書館文化史研究会　事務局　石井敬三